「遠藤さんの熊捕り語り」（編集）　助教授４年　鈴木正

（略）昭和の初期12月中旬、端野町緋牛内方面から数人のハンターが、初冬の雪山で熊の足跡を発見。これを追って端野町忠志赤岩の裂け目の洞窟に追い込んだが穴の入り口は小さく、そこで木の枝などを押し込んでやると、熊は怒って木の枝を後ろへやるので、熊は段々前へ出てきます。また、火を焚いて煙で燻り出そうとやったが奥が深く、効き目がない。３日くらい焚き火をして見張ったが熊をおびき出せず、ついに遠藤清光さんが「よし、俺が中に入る」と言いだし、清光さんが入ることになったが、穴が小さいのでメリヤスシャツ、もも引き姿になり、銃身が長いので銃床と床尾板の木の部分を外し銃身だけにし、薬莢を２つ下帯に挟み、懐中電灯を首にかけて、足の方から後ろ向きに入り、もし危険な場合はすぐ逃げ出せるよう腰にロープをつけ、端を外で待機する人たちが持ち、合図のありしだいすぐ引き出すようにした。

穴の中は真っ暗で、曲がりくねったでこぼこの熊穴の中を音のせぬよう静かにようすを伺いながら、時々止まって熊の息の音はしないか？としばらくようすを探っていると、外の人たちはロープが伸びていかないので大変だ！とばかりに清光さんを引き出そうと何回か繰り返したが、清光さんが中でロープを外したのでロープだけが穴の外に外に出てきたため、再び「さあ大変！どうしよう」と大騒ぎになった。清光さんが中でロープを外したことは知るよしもなかった。

ロープから解放され自由になった清光さんは、慎重に進んでいくうちに穴が大きくなったので向きを変えて懐中電灯で照らしてみると、熊がこちらを向いて座り、眠っていたので額に銃口を押しつけるようにして引き金を引きました。

外の人たちは銃声がしたのでどうなったのか心配しましたが、清光さんの無事を喜び合い、熊の穴に再びロープが入れられ、中で解体した熊を引き出したとのことです。（略）

常呂町高齢者教室『平成９年度　オホーツク大学文集　トーコロ』掲載
（平成10年３月発行）